

平城宮第一次大極殿院東方の調査

―第612次

1 はじめに

奈文研では、1959年以来、継続的に第一次大極殿院地区の発掘調査をおこなってきた。これまでの調査成果から、第一次大極殿院地区の遺構は、大きく3つの時期に分かれることがあきらかになっている（『平城報告Ⅺ』『平城報告ⅩⅦ』）。

I期は奈良時代前半（第一次大極殿院の時期）で、東西約180m、南北約320mの範囲を築地回廊で囲み、回廊内の北に大極殿を建て、その南を礎敷の広場とする。II期は奈良時代後半（称徳天皇の西宮の時期）で、南北幅を狭めて内裏と同規模の区画（東西約180m、南北約190m）をつくり、区画内の北半分に多数の掘立柱建物を建てる。III期は平安時代初期（平城太上天皇の西宮の時期）で、II期とほぼ同じ場所に区画施設をつくり、その内側に多数の掘立柱建物を建てる。また、区画の外側にさらに堀（外郭堀）をめぐらせる。

今回の調査は、国土交通省による第一次大極殿院の復原整備にともなうものである。調査地は、奈良時代には、第一次大極殿（I期）や称徳天皇の西宮（II期）の東面を区画する施設の東側にあたり、過去の調査成果から、平安時代初頭には、平城太上天皇の西宮（III期）の東外郭堀が想定された場所である。

調査区は東西16m、南北25m、調査面積は400㎡で、うち16㎡は既調査区との重複部分である。調査は2019年4月15日より開始し、同年8月2日に終了した。

2 基本層序

基本層序は、上から①表土・造成土（100～150cm）、②耕土（約20cm）、③灰黄褐色砂質土（約20cm、近世以降の遺物包含層、調査区南半に分布）、④褐色砂質土（約10cm、中世以降の遺物包含層、調査区中央部に分布）、⑤暗黄褐色砂質土（約5cm、整地土・平城太上天皇西宮の造営時）、⑥明黄褐色砂質土（約30cm、整地土・平城宮造営時）、⑦黄橙色砂礫土（10～70cm、地山）、⑧灰白色粘土（地山、標高69.8～70.2m）である。

遺構検出は、⑤層の上面でおこなった。ただし一部で

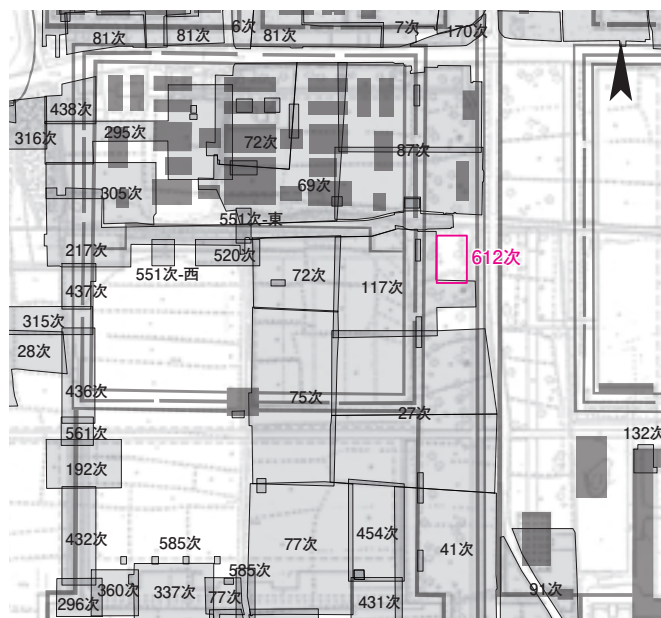


図169 第612次調査区位置図 1:4000

は⑤層を掘り下げ、⑥層の上面でも検出をおこなった。遺構検出面の標高は70.4～71.0mで、北から南に向かって低くなる。

なお、調査区北壁および南壁の土層断面観察によると、⑦層を掘り込む自然流路が南北方向に位置をずらしながら走っており、平城宮造営直前には、流路がある程度自然に埋まって凹凸のある状態であったところを⑥層で整地したと考えられる。

3 検出遺構

調査の結果、平安時代の掘立柱堀1条と素掘溝2条、奈良時代の可能性のある掘立柱堀1条を検出した。

南北堀SA8238 調査区の西部で検出した掘立柱堀。これまでにおこなった周辺の調査（第27・87・117・170・217次）でも確認している遺構で、平城太上天皇の西宮の東外郭堀と考えられている。今回の調査では、柱穴10基、柱間9間分を検出した。北と南はさらに調査区外へ続く。柱穴の多くは、掘方の平面が一辺約50cmの隅丸方形ないし円形を呈する。断割調査の所見（図172左）および調査区南壁にかかる柱穴の断面観察（図171下）によると、掘方の深さは検出面から35～40cmである。柱間寸法は2.1～2.7m（7～9尺）。柱間寸法が不揃いであることはこれまで指摘があり、2.4～3.0m（8～10尺）とされてきたが（『平城報告ⅩⅦ』）、今回の調査成果により、さらにばらつき

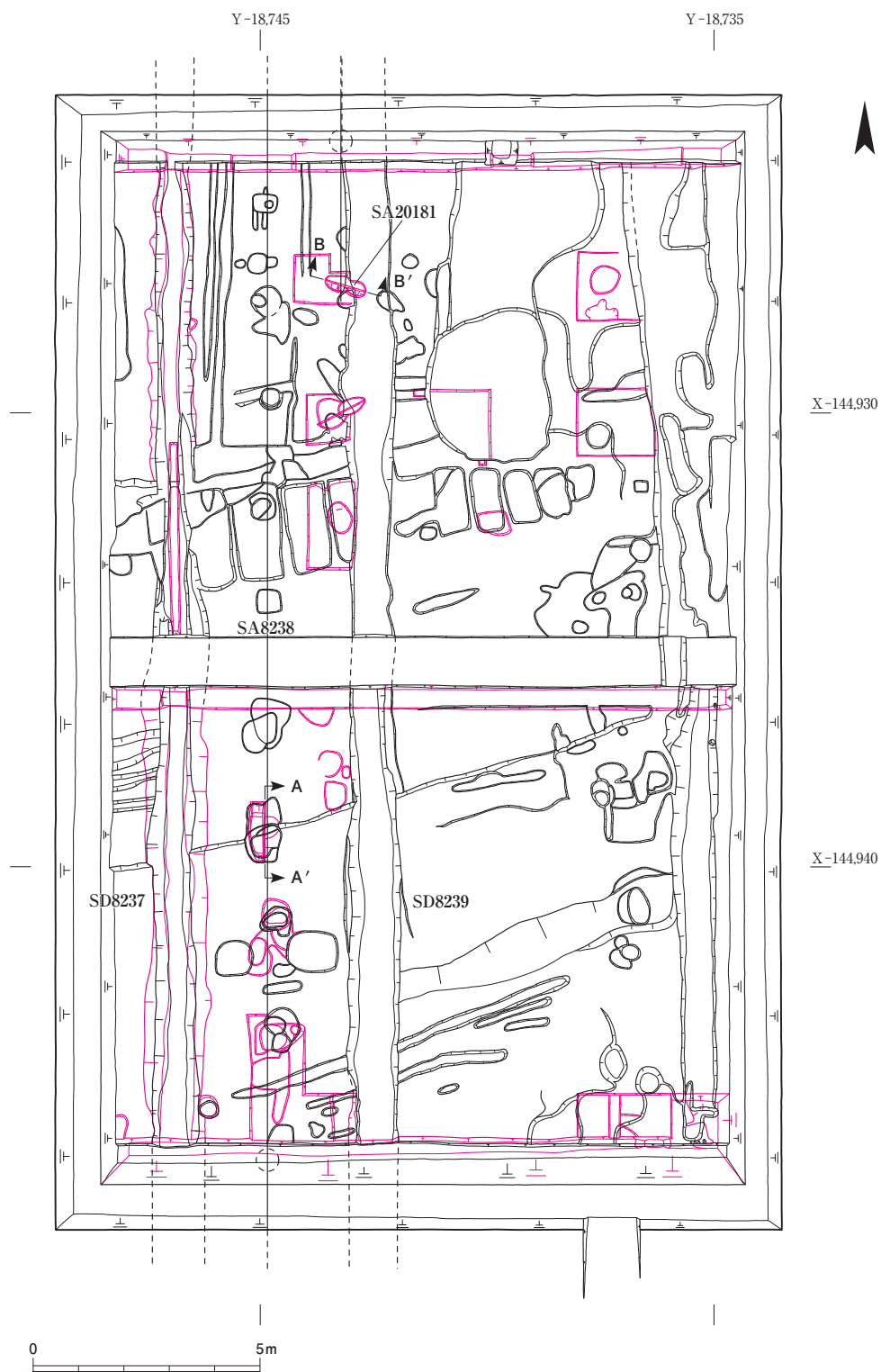


図170 第612次調査区遺構図 1 : 150

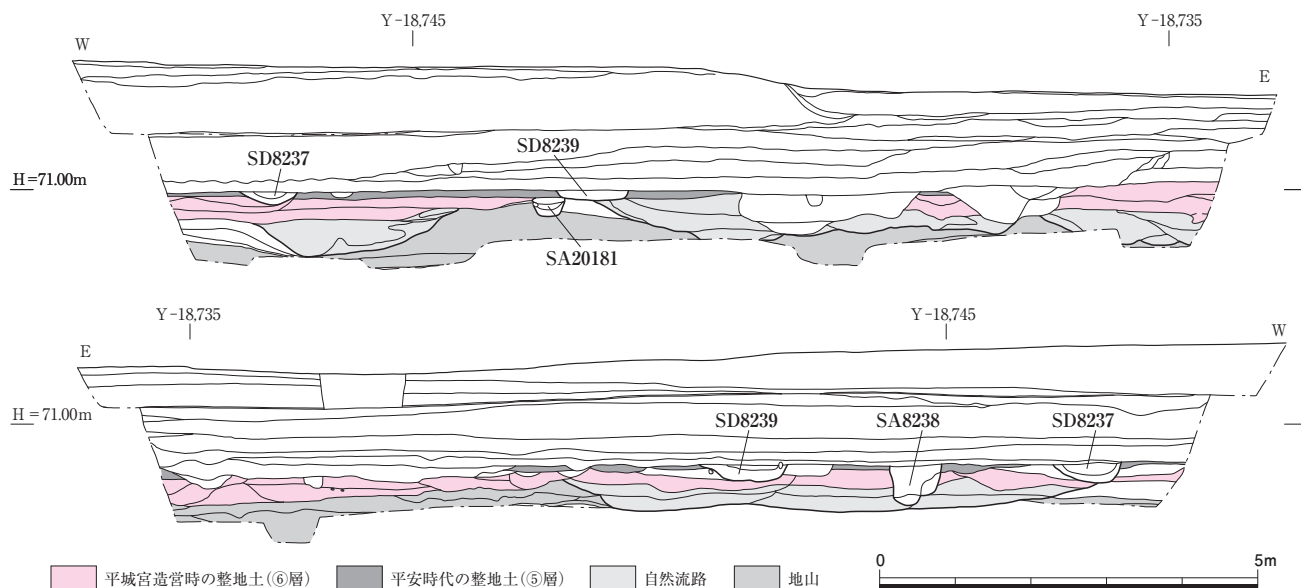


図171 第612次調査区北壁(上)・南壁(下)土層図 1:100

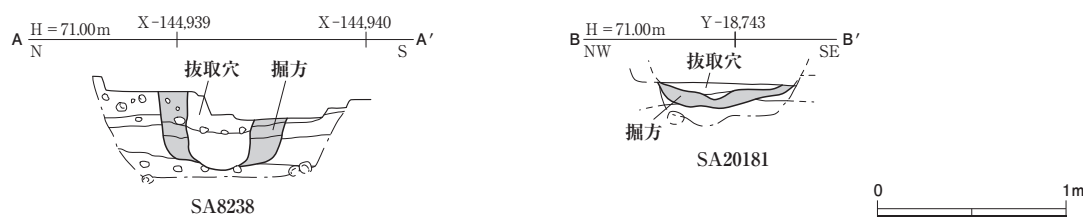


図172 第612次調査区柱穴断面図 1:40

が大きくなった。

南北溝SD8237 調査区の西辺で検出した、北から南へ流れる素掘溝。幅約1m、深さ約35cmで、長さ約23m分を検出した。北と南はさらに調査区外へ続く。溝肩は崩れて幅が広がっている部分が多い。埋土は大きく上層(橙褐色砂質土)と下層(灰褐色砂質土)に分かれる。いずれも人工的な埋立土とみられ、機能時とみられる自然堆積はほとんど認められなかった。埋土には少量の瓦を含み、土器はほとんど含まない。南北堀SA8238の心から溝の心までは、約2.2m(7.5尺)である。

南北溝SD8239 調査区の中央やや西寄りで検出した、北から南へ流れる素掘溝。幅約1m、深さ約20cmで、長さ約23m分を検出した。北と南はさらに調査区外へ続く。埋土および出土遺物の様相は、南北溝SD8237と同様である。南北堀SA8238の心から溝の心までは、約2.2m(7.5尺)。南北堀SA20181の柱穴と重複し、それより新しい。

南北堀SA20181 調査区北辺のY=-18,743付近で、南北に並ぶ柱穴2基を検出した。柱間は約3.0m(10尺)。いずれも南北溝SD8239と重複し、それより古い。南の柱穴は暗黄褐色砂質土(⑤層)を掘り下げ、明黄褐色砂質土(⑥層)の上面で検出した。平面は長径約75cmの不整円形を呈し、深さは約25cmである(図172右)。北の柱穴は調査区北壁の土層断面で確認した。幅約40cm、深さ約25cmで、⑤層に覆われる(図171上)。奈良時代の簡易な遮蔽施設の可能性がある。(桑田訓也)

4 出土遺物

土器・土製品 整理箱2箱分の須恵器、土師器、中近世の陶磁器などが出土したが、調査面積に対する出土量は、非常に少ない。古代の須恵器、土師器はいずれも小片で、須恵器杯B蓋の転用硯が1点出土した。また、SD8237からは黒色土器の破片が出土したが、詳細な時期は不明。(神野 恵)

表23 第612次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
			型式不明 (奈良)		1	鬼瓦 I A	1
			時代不明		3	用途不明道具瓦	1
軒丸瓦計		0	軒平瓦計		4	その他計	
	丸瓦			平瓦		凝灰岩	レンガ
重量	3.846kg			20.483kg	0	0	0
点数	83			469	0	0	0

瓦磚類 出土した瓦磚類の一覧を表23に掲げたが、出土量は極めて少ない。また、型式が判明するものもほとんどなく、わずかに鬼瓦IA型式が1点確認できたのみである。

(林 正憲)

5 地震痕跡

調査区東南隅において、地震による液状化の痕跡である砂脈と噴砂痕を検出した(図173、巻頭図版7)。遺構検出面の下層の地山の様相としては、下位より明灰青色砂泥互層、青灰褐色砂礫、混礫灰褐色砂質泥が確認された。このうち明灰青色砂泥互層は基本層序の⑧灰白色粘土およびその下層を含み、平城第530次調査の基盤層としても確認しており、奈良(大和)湖形成期の湿原堆積物と考えられる。その上位の堆積は奈良盆地の形成史を反映したもので、奈良盆地東縁断層により隆起した丘陵部から供給されたと考えられる、扇頂から扇央にかけての扇状地堆積物である青灰褐色砂礫、さらに扇端の氾濫原堆積物である混礫灰褐色砂質泥の順に堆積する。この混礫砂質泥は、基本層序の⑦黄橙色砂礫土にあたる。地形としては、調査区東側に隣接する市道大極線(通称みやと通り)に向かい基盤層が急激に落ち込む谷地形を形成し、その上位堆積物が谷を埋めている。

今回発見した地震痕跡は大きく2層ある。一つ目は基盤層と扇状地堆積物の間を液状化した砂脈が貫進し、氾濫原堆積物の上に砂が噴き出して噴砂丘を形成しつつ堆積している。この噴砂丘には少なくとも3層の級化層構造がみられ、噴砂が間断的に複数回噴出したことを示唆する。また噴砂丘には細かな板状葉理が発達し、噴出口から流れ出した砂泥が高速で側方へ流れて堆積したことを示す。このような噴砂丘の構造が保たれた状態で検出されることは珍しい。平城宮造営時の整地土(⑥層)が噴砂丘を被覆することから、平城宮造営以前に発生した地震であることがわかる。

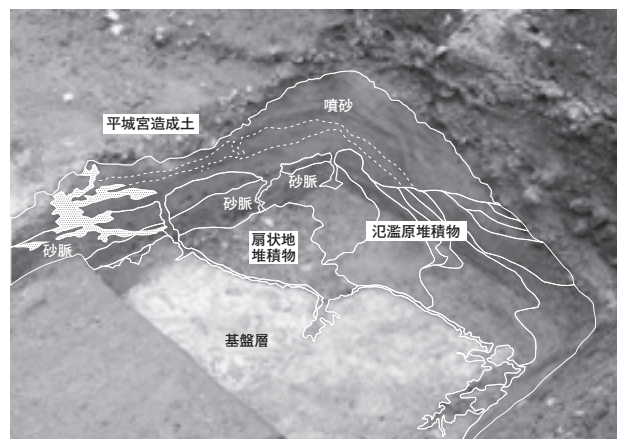


図173 調査区東南隅で検出した地震痕跡(南西から)

二つ目の痕跡は、基盤層と扇状地堆積物の間を砂脈が貫進したのち、氾濫原堆積物と一つ目の噴砂丘、さらに平城宮造成土を貫進する。噴砂丘は削剥され検出できなかったため、この地震の発生時期は平城宮造営以降である。

地震による液状化は、一般に地下水位の高い低湿地などの軟弱地盤域で、震度5弱以上の強震によって起こりやすいとされる。一つ目の地震痕跡については、第530次(『紀要 2016』)、第552次・577次調査(『紀要 2017』)などをはじめ複数の調査地点で確認している。また平城宮廃絶後の地震痕跡についてもこれらの調査地点でみつがっている。今後、これらの地震発生時期の対比や絞り込み、さらに地震による被災の全貌を検討していきたい。

(村田泰輔)

6 まとめ

既調査の成果による予想どおり、平安時代初頭(Ⅲ期)の遺構として、平城太上天皇の西宮の東外郭堀と考えられる掘立柱堀1条と、それにとりまう素掘溝2条を検出した。遺構の規模や位置関係についても、概ね従来の調査成果を追認した。ただし、堀の柱間寸法はさらにばらつきが大きくなり、この時期の造営の実態を知る上で貴重な資料を得た。

奈良時代の遺構は、当該時期の可能性のある掘立柱堀1条(柱穴2基)のみと希薄であり、第一次大極殿院(Ⅰ期)や称徳天皇の西宮(Ⅱ期)が営まれた時期には、空閑地として保たれ続けた可能性が高いことを再確認した。

また、平城宮造営以前と造営以後の地震痕跡を検出し、災害の歴史に関するデータを蓄積することができた。

(桑田)